

道元と如浄 (九)

—『如浄禅師語録』到来を中心に—

伊 東 洋 一

九 正法眼蔵遍參

『梅華』の巻に続いて『如浄禅師語録』からの引用のあるものは、十一月十九日示衆と奥書にある『見佛』の巻であるが、そこでの如浄の句は『梅華』の巻に取り上げられているものであるから、ここでは次の十一月二十七日「在越宇禪師峯下茅庵示衆」と奥書のある『遍參』の巻に移ろう。ここでも順を追って検討しよう。

(1) 佛祖の大道は、究竟參徹なり、足下無絲去なり、足下雲生なり。しかもかくのごとくなりといへども、華開世界起なり、吾常於此切なり。このゆゑに、甜苽徹蕒甜なり、苦瓠連根苦なり、甜甜徹蕒甜なり。かくのごとく參學しきたれり。⁽⁹⁾

17 大意をとってみる。仏道（修行）ということは、善知識を訪ね究極の真理に向って參究參學するのに徹底することである。そのように徹底するとは、古語で云う「足元を縛りつける糸を取り去り、丁度達磨が外道を折伏して足元か

ら生じた瑞雲に乗って去った」ように自由な境地なのである。そういう訳であるから、参究参学とは徹底すること、それになりきること、花が開く時は全世界が花になりきり、春になりきるといふ古語の「華開世界起」であり、また洞山良价のいう「吾常於此切」、つまり私は常に仏道になりきるといふことである。だから古語にいうようにまた甘い瓜が蒂（へた）まで甘く、苦い瓢は根まで苦い、甘さは甘さに苦さは苦さに徹し切っているといつてもよい。参究参学とはこのようなものである。

ここでは要するに「それになりきる」「徹しきる」といふ遍参の意味を冒頭に述べているといつてよい。次いで祖师たちの言葉を通して遍参の具体的説明に移る。最初は玄沙山宗一大師と師の雪峯禅師の問答である。

(2)玄沙山宗一大師、因雪峯召_レ師云、「備頭陀、何不_二遍参去。」師云、「達磨不來東土、二祖不往西天。」雪峯潑然之。

いはく遍参底の道理は、翻巾斗参なり、聖諦亦不爲なり、何階級之有なり。⁽⁴⁾

この大意は、師雪峯義存が「何で遍参に出ないのか」とたずねたのに対して「達磨は中国に来ませんでしたし、二祖慧可もインドに行きませんでした」と答えた玄沙師備を尤もなことと深くうなづいたと云う話を道元が評して、遍参といふことの真の意味はここではすっかりひっくり返り、古語の「仏の教えに説かれず修行のどの段階にもない」仕方で語られている、といったことになろうか。要するに、遍参とは文字通りにはあちこち師を求めて参学することであるが、それが仏道の真理をあちこち外（中国やインド）に求めることから内に転回させているということであろう。真理は彼処にのみあるのでなく、此処にも否此処にあるのである。次ぎは南嶽大慧禅師と六祖曹谿慧能禅師

の問答を中心とする。

(3)南嶽大慧禪師、はじめて曹谿古佛に參ずるに、古佛いはく、「是甚麼物恁麼來。」この泥彈子を遍參すること、始終八年なり。末上に遍參する一著子を古佛に白してまうさく、「懷讓會得當初來時、和尚接懷讓、是甚麼物恁麼來。」ちなみに曹谿古佛道、「懶作麼生會。」ときに大慧まうさく、「説似一物即不中。」これ遍參現成なり、八年現成なり。曹谿古佛とふ。「還假修證否。」大慧まうさく、「修證不無、染汗即不得。」すなはち曹谿いはく、「吾亦如是、汝亦如是、乃至西天諸佛諸祖亦如是。」これよりさらに八載遍參す。頭正尾正、かぞふるに十五白の遍參なり。恁麼來は遍參なり。説似一物即不中に諸佛諸祖を開殿參見する、すなはち亦如是遍參なり。入畫看よりこのかた、六十五百千萬億の轉身遍參す。等閑の入一叢林、出一叢林を遍參とするにあらず。全眼晴の參見を遍參とす、打得徹を遍參とす。面皮厚多少を見徹する、すなはち遍參なり。⁽⁵⁾

ここは南嶽懷讓が六祖慧能に初めて相見の時「お前は何もので、どこから来たか」と聞かれ、この言葉を遍參するのに八年を費やし、その末に遂に會得したとして「何を會得したかと云われても、それを説明したのでは当りません」と答えた。それは遍參八年間の成果なのである。六祖は「それではまだ修行が必要か」と問うと、「修行は要らないわけではありません。ただ修行にとらわれない純粹でなければなりません」と答えた。そこで六祖はうなずいて「わたしもその通りだ、お前もそうだし、そしてインドの仏祖たちも皆そのようであった」と云った。南嶽はそれからさらに八年間遍參し、前後都合十五年遍參した。さてどこから来たかというのも遍參である。「説明したのでは当りません」といって諸仏祖を訪ねて教えを受けるのも遍參である。叢林に入って以来幾度となく身を翻えて行脚し

てきた。だがいい加減に叢林に入ったり出たりするのは遍参ではない。遍参とは眼睛を見開いて参見することであり、徹底的にやりぬくことであり、師の面目を見通すことである。

次は雪峯と玄沙の問答の評釈である。先ず一般的に

(4) 雪峯道の遍参の宗旨、もとより出嶺をすすむるにあらず、北往南來をすすむるにあらず、玄沙道の達磨不來東土、二祖不往西天の遍参を助發するなり。⁽⁶⁾

「何故遍参しないのか」という雪峯の問いの真意は、山を下ってあるいは北に南に行却することをすすめたのではない。それは玄沙の「達磨も中国に來た訳でもなく、二祖もインドに行つた訳でもない」との答えを期待してのことなのである。他方玄沙の「達磨も中国に來た訳でもなく、……」について

(5) 玄沙道の達磨不來東土は、來而不來の亂道にあらず、大地無寸土の道理なり。いはゆる達磨は、命脈一尖なり。たとひ東土の全土たちまちに極涌して参待すとも、轉身にあらず、さらに語脈の翻身にあらず。不來東土なるゆゑに、東土に見面するなり。東土たとひ佛面祖面相見すとも、來東土にあらず。拈得佛祖、失卻鼻孔なり。⁽⁷⁾

玄沙の「達磨は中国に來ない」ということであるが、これは実際には中国に來られたが、その來たのは來る來ないの相對の論ではない、それらを超えている。古語に云う「大地に對立差別の寸土はなく」、中国もインドも一切が仏国土、仏身の眞実体である。達磨はといえば仏法の生命の現われである。たとい中国の全土が涌き起つて達磨にかし

ずいたから中国に来たというのでもなく、来る来ないの言葉によって来たのでもない。対立差別を超えているから中国に姿を現わしたのである。中国がたとえ達磨に直面するとしても達磨は中国に来たのではない。古語の「仏祖をとらえようとすればかえって鼻の孔を見失う」で、インドも中国も至る所達磨の世界で特にここが達磨の世界というのではない。次いで二祖のインドに行かないに移る。

(6)おほよそ土は東西にあらず、東西は土にかかはれず。二祖不往西天は、西天を遍參するには不往西天なり。二祖もし西天にゆかば、一臂落了也。しばらく二祖なにとしてか西天にゆかざる。いはゆる、碧眼の眼睛裏に跳入するゆゑに不往西天なり。もし碧眼裏に跳入せずば、必定して西天にゆくべし。袂出達磨眼睛を遍參とす。西天にゆき東土にきたる、遍參にあらず。天台・南嶽にいたり、五臺・上天にゆくをもて遍參とするにあらず。四海五湖もし透脱せざらんは、遍參にあらず。四海五湖に往來するは、四海五湖をして遍參せしめず。路頭を滑ならしむ、脚下を滑ならしむ。ゆゑに遍參を打失せしむ。⁽⁸⁾

このように大地は仏身の真実体であるから東西の対立差別はなく、東西は大地に関係ないのである。そこで「二祖はインドに行かない」ということであるが、インドに行脚したとしてもインドに行かないのである。もし二祖がインドに行ったとすれば、中国が留守になって片手落ちというものである。それでは二祖はどういう訳でインドに行かなかったか考えてみよう。それは達磨の青い眼の眼睛に飛び込んだからインドに行かなかったのである。もしあの青い眼の眼睛に飛び込まなかったら、かれはきつとインドに行ったであろう。つまりかれにとっては「達磨の眼睛を抉り出す」⁽⁹⁾（先師如淨禪師の言葉）ことが遍參であつたのである。インドに行き中国に来る、そうした往来が遍參ではな

い。天台山に行きまた南岳山に行き、五台山に行き天上に行くことを遍参というのではないのである。四海五湖を超脱しなければ遍参といえない。四海や五湖を往来してそれに執われている間は、四海五湖を自由にすることはできない。そんなことでは、うろろうして路面を踏み固めて滑らかにしたり、足下を滑らかにするだけで、遍参を見失ってしまう。

(7)おおよそ盡十方界、是箇眞實人體の参徹を遍参とするゆゑに、達磨不來東上、二祖不往西天の参究あるなり。遍参は石頭大底大、石頭小底小なり。石頭を動著せしめず、大参小参ならしむるなり。百千萬箇を百千萬頭に参見するはいまだ遍参にあらず、半語脈裏に百千萬轉身なるを遍参とす。たとへば、打地唯打地は遍参なり。一番打地、一番打空、一番打四方八面來は遍参にあらず。俱胝参天龍、得一指頭は遍参なり、俱胝唯豎一指は遍参なり。

先徳のいう「この十方の世界のすべては仏身の眞実体である」ということを徹底的に学ぶのが遍参であるから、「達磨は中国に來ないし二祖はインドに行かない」という考究があるのである。遍参は先徳のいう「大きい石は大きいまま、小さい石は小さいまま」で、石は動かさずそのままに、大はそのまま小はそのまま考究するのである。百千万回足を運んで百千万人の善知識を訪ねて知識を求めめるのは、まだ遍参ではない。たとえば遍参の半語である遍、あまねくといつてもその中には百千万の個々の場合があり、それに一つ一つ徹し切るのが遍参である。一度は地面を打ち、一度は空間を打ち、一度は四方八方を打つというのは遍参でない。俱胝和尚は天龍和尚のところに来て、一本の指を立てるのを見て得悟したというのは遍参である。それから後俱胝和尚がただ指を立てることを教導法としたのも遍参である。次ぎに玄沙と一僧との問答を掲げ、それを評する。

(8) 玄沙、示衆云、與我釋迦老子同參。時有僧出問、「未審、參見甚麼人。」師云、「釣魚船上謝三郎。」

釋迦老子參底の頭正尾正、おのづから玄沙老漢と同參なるべく。玄沙參底の頭正尾正、したしく釋迦老子と同參す。釋迦老子と玄沙老漢と、參足參不足なき、これ遍參の道理なり。釋迦老子は玄沙老漢と同參するゆゑに古佛なり、玄沙老漢は釋迦老子と同參なるゆゑに兒孫なり。この道理、審細に遍參すべし。^四

釈尊の徹底的な修行の師は釈尊以外にない。玄沙の徹底的な修行の師は玄沙以外にない。従つておのづから釈尊と玄沙とは修行を共にする仲間である。釈尊と玄沙と一方が修行が足り、他方が修行が足りないということがないのが遍參の道理である。釈尊が玄沙と修行を共にするのであるから古仏であり、また玄沙は釈尊と修行を共にするのであるから兒孫である。この道理をつまびらかに検討すべきである。

(9) 釣魚船上謝三郎。この宗旨、あきらめ參學すべし。いはゆる、釋迦老子と玄沙老漢と、同時同參の時節を遍參工夫するなり。釣魚船上謝三郎を參見する玄沙老漢ありて同參す、玄沙山上禿頭漢を參見する謝三郎ありて同參す。同參不同參、みづから功夫せしめ、他づから功夫ならしむべし。玄沙老漢と釋迦老子と同參す、遍參す。謝三郎與我、參見甚麼人の道理を遍參すべし。同參すべし。いまだ遍參の道理現在前せざれば、參自不得なり、參自不足なり。參他不得なり、參他不足なり。參人不得なり、參我不得なり。參拳頭不得なり、參眼睛不得なり。自釣自上不得なり、未釣先上不得なり。^四

「魚釣舟に乗った謝三郎」といった意味を明らかに参学すべきである。それは釈尊と玄沙禪師と一緒に参禅したその時を遍参功夫するのである。魚釣舟上の謝三郎に会っている玄沙禪師がおり、また玄沙山上で禿頭の禪師に会っている謝三郎がある。それが同参か同参でないか自分でも考え、他方でも考えてみるがよい。謝三郎と自分と一体誰れに会ったか、その道理を遍参し、同参すべきである。それでも遍参の道理が分らなければ、それは自らに会うことができないというもので、自らに会うことに十分でなければ、他と会うことはできない。拳頭(極要なもの)に会うことができない。眼睛(本質的なもの)に会うことができない。自分が釣り自分で釣り上がることはできない。まだ釣らない先に上りきることはできない。

(10)すでに遍参究盡なるには、脱落遍参なり。海枯不見底なり、人死不留心なり。海枯といふは、全海全枯なり。しかあれども、海もし枯竭しぬれば、不見底なり。不留全留、ともに人心なり。人死のとき、心不留なり。死を枯來せるがゆゑに、心不留なり。このゆゑに、全人は心なり、全心は人なりとしりぬべし。かくのごとくの一方の表裏を参究するなり。⁽¹⁰⁾

すでに遍参を究め尽くすと、それは遍参を脱落した境地となる。古語にいう「海涸れて底を見ず」であり、「人死して心を留めず」である。海が涸れるというのは、すべて海が完全に涸れるということである。しかしながら海が涸渇してしまふと底が見えない(海面があつたから海底があつたのである)。「留めない」も「全く留める」も共に人の心である。人が死んだとき心は留まらない。死の全体が来るのであるから、心は留まらない。それだから人全体が心である、心の全体が人であるとしるべきである。このように一方について表と裏をまなび究めるのである。こうし

て如浄の言葉『如浄禪師語録』よりの引用となるのである。

(1) 先師天童古佛、あるとき、諸方の長老の道舊なる、いたりあつまりて上堂を請するに、上堂云、大道無門、諸方頂顛上跳出。虚空絶路、清涼鼻孔裏入來。恁麼相見、瞿曇種賊、臨濟禍胎。喫。大家顛倒舞春風、驚落杏華飛亂紅。⁽¹⁴⁾

ある時先師である天童山の古仏如浄禪師のところに、昔の道友である諸方の長老たちが集まってきて、法語を請うた。如浄禪師は上堂して次のように云われた。「仏道には門がなく、皆さまの頭の上を超えている。虚空にもまた路がないのに、ようこそこの清涼寺の私の許に参えられました。ところで皆さまと相見えるのは、釈尊の仏教を奪う盗賊や臨濟の禍根をはらんでゐる悪漢とお会いしているようなものであります。呵々。それは恰も大家が顛倒して春の嵐に舞い、それに驚いて杏の紅の花が飛乱してゐる風光であります。」

(14) 而今の上堂は、先師古佛ときに建康府の清涼寺に住持のとき、諸方の長老きたれり。これらの道舊と先師とは、あるときは賓主とありき、あるいは鄰單なりき。諸方にしてかくのごとくの舊友なり、おほからざらめやは。あつまりて上堂を請するときなり。渾無箇話の長老は交友ならず、請するものかずにあらず。太尊貴なるをかしづき請するなり。⁽¹⁴⁾

いまいう上堂は、先師如浄古仏が建康府の清涼寺の住職であったころ、諸方の長老がやってきたときのことであ

る。これらの古い道友たちと如浄禪師との関係は、あるときは任持と雲水の間柄、あるときは坐禪を共にした仲間同志であった。諸方にちらばっているこのような道友が沢山おられた。それらの道友が集まってきて如浄禪師に上堂を請うたのである。集まってこのような話の全然出ないような長老では友達といえまい。上堂を請うる友の教にも入らない。また如浄禪師がすぐれて尊いからこそかきずいて上堂を請うたのである。

(13) おおよそ先師の遍參は、諸方のきはむるところにあらず。大宋國二三百年来は、先師のごとくなる古佛あらざるなり。大道無門は、四五千條華柳巷、二三萬座管絃樓なり。しかあるを、渾身跳出するに餘外をもちゐず、頂顛上に跳出するなり、鼻孔裏に入來するなり。ともにこれ參學なり。頂顛上の跳脱いまだあらず、鼻孔裏の轉身いまだあらざるは、參學人ならず、遍參漢にあらず。遍參の宗旨、ただ玄沙に參學すべし。^備

一体先師如浄禪師の遍參は、これを見ても諸方の禪者の究めることのできないものである。大宋國でもここ二三百年この方先師如浄禪師のような古仏がなかったのである。大道（仏道）に門はないとは、古語に云う「四五千の町すじの花柳の巷、二三方席の管絃の樓」で、つまり花柳の巷も路、管絃の樓も路、いたるところ大道に入る路であるということである。そこで全身でそこに跳び越えるには他に方法はない。頭の頂きを遠く跳び越えるのであり、鼻の孔の中に入り来るのである。それが參學である。頭の頂きを跳び越えることも鼻の孔の中に身を転ずることもできないのは參學人ではない。遍參の人でもない。遍參ということの本義はただ玄沙禪師に參學すべきである。

(14) 四祖かつて三祖に參學すること九載せし、すなはち遍參なり。南泉願禪師、そのかみ池陽に一住してやや三十

年、やまをいでざる遍参なり。雲巖・道吾等、在藥山四十年のあひだ功夫参學する、これ遍参なり。二祖そのかみ高山に参學すること八載なり、皮肉骨髓を遍参しつくす。

遍参はただ祇管打坐、身心脱落なり。而今の去邦邊去、來遮裏來、その閒隙あらざるがごとくなる、渾體遍参なり、大道の渾體なり。毗盧頂上行は、無諍三昧なり。決得恁麼は、毗盧行なり。跳出の遍参を参徹する、これ胡蘆の胡蘆を跳出する、胡蘆頂上を選佛道場とせることひさし。命如絲なり、胡蘆遍参胡蘆なり。一莖草を建立するを遍参とせるのみなり。^m

四祖道信禪師が三祖僧璨禪師に九年間参學されたが、これが遍参である。また南泉普願禪師がむかし池陽の南泉山に住居されて、約三十年間山を出られなかつたのは遍参である。雲巖曇晟禪師や道吾円智禪師等は萊山惟儼禪師の会下に在って、四十年間坐禪弁道されたが、これが遍参である。二祖慧可大師はむかし嵩山少林寺の達磨大師に参學すること八年である。こうして達磨大師の皮肉骨髓を遍参しつくされたのである。

遍参とは先師のいわれる「ただひたすら坐禪し、身心脱落する」ことである。今、去るには徹底して去り、来るには徹底して来て、そこに隙間がないように渾然一体なのが遍参である。大道（仏道）の全体が遍参である。古語に「毘盧舍那仏の頭のうえを越えて行けば、そこに一如の境地（無淨三昧）がある」と云われる。決定的にその境地を得るには毘盧舍那仏の頂上を跳んでゆかねばならない。その頭の上を跳び越えるという遍参に徹することは、先師のいわれる「瓢箪の蔓が瓢箪にまつわる」といった跳び越えて、その瓢箪の頭上を跳び越えるということはもう久しい昔から長いこと修行の道場としてきたところである。その命脈は糸のようにとぎれることなく、瓢箪が瓢箪を遍参するのである。一本の草を地面に挿して寺院の建立とするよう、一本の草を拈じて丈六の仏身の建立とするのを遍参と

するのである。

以上『遍参』の巻を順を追って意味を辿ってきた。そこでわれわれの問題である『如浄禅師語録』の到来が道元にいかなる影響を及ぼしたか、更に云えば「心塵脱落」か「身心脱落」かの問題であるが、この観点に立って『遍参』の巻を検討してみよう。

総じて『遍参』の巻は実に堂々たる道元の主張で、そこに到来した『如浄禅師語録』の影響を受けての道元のたじろぎやあるいはかげりと云ったものは全くといってよいほど見られない。相も変らぬこれまでの高い調子、意気軒高で微動だにせぬ道元が感じられるといつてよい。

次ぎにもう少し内容に立ち入ってみる。この『遍参』の巻の最後の文節で、「遍参はただ祇管打坐、身心脱落なり」と述べられている。これは大意をとった際にも触れたように「先師」如浄禅師の言葉として、例えば天童山如浄禅師の方丈において聞いたところのメモとされる『宝慶記』に「堂頭和尚示曰、参禪者身心脱落也、不用焼香、禮拜、念佛、修懺、看經、祇管打坐而已。」⁽¹⁾（傍点筆者）といったように間違いなく如浄禅師の言葉であるが、『宝慶記』と『遍参』の巻の間に『如浄禅師語録』の到来が介在しているのに「遍参」の巻が不変「身心脱落」としているのは、そこに何ら影響がなかったといつてよいであろう。否、『如浄禅師語録』到来によって「身心脱落」の確信をいよいよ深められたということであれば、大きな影響があったということにならう。このように道元が「身心脱落」の確信をいよいよ深めたか、あるいは少くとも全然影響を受けることがなく、従前と変りなく「身心脱落」の確信を持続するのには、道元に無意識的にあれどのような論拠があつたことなのであろうか。

そこでこの巻の最初の文節（文節(1)）を見る。この文節の主意は「参学」ないし「参徹」ということ、要するにそ

れ(參)になりきる、それに徹底するということが云いたいところであろう。ところでこの徹底性ということはこの巻の他の個処にも多く見られる、あるいはこの巻を貫いている横糸とさえ見られないこともない。例えば先ず文節(3)では、遍参ということは叢林を出たり入ったり右往左往することではなく、「全眼晴の参見」(眼晴をかつと見開いての参見)のこと、「打得徹」(徹底的にやりぬく)、「面皮厚多少を見徹する」(師の面目を見透す)といった言葉からも知られる。文節(6)では、インドへ行ったり中国に來たり、天台山や南岳山また五台山や天上へ、また四海や五湖を往来するのは、たゞうろうろして足下や路面を徒に踏みかため滑めらかにするだけで遍参ではないとされる。そして如淨禪師の「抉出達磨眼晴」の言葉が引かれる。そうしてみれば、この如淨禪師の言葉は徹底することの意味以外には考えられない。文節(7)では、遍参を「石頭小底小」なる先徳の言葉で説いている。そしてこれを評して道元は、石は動かさずにそのままに、大はそのまま小は小のままの参究であるとして、ここでも百万回足を運んで百万人の善知識を訪ねて知識を求めたり、あるいは地面を打ちあるいは空間を打ち、あるいは四方八方を打つといった意味での遍参と対比させているのはこの先徳の言葉は徹底性の意味であろう。そして遍参の遍、あまねくといつてもその中に百万の個々の場合があり、その一つ一つに徹し切る(「半語脈裏に百千萬轉身なるを遍参とす」)ことだと云うに至ってはも早疑いはない。このような徹底性は文節(8)の积尊の師は积尊と説くところ、文節(9)の玄沙禪師と魚釣舟の謝三郎との同参にも見られるところである。

ところで遍参はインドや中国といったあちこちに往来するのではないとすれば、それはまた外に求めるのではない。仏道の真理を求めるのに外から内へということにもなる。この点を問題にしているのは文節(2)であろう。さらに徹底性ということがあれやこれやの方向をとるのでなく、外から内へ、内の中でもその一つ一つに徹し切るのだとされれば、相対的見方は否定されざるを得ない。その点は例えば文節(5)に見られる。そこでは「達磨は中国に來ない」と

いう意味は、ここでの来ないは来る来ないの来ないではない、そのような相対の論ではない（「來而不來の亂道にあらず」とされ、「大地無寸土」（大地に対立差別をいれる寸土もない）」という古語が引かれる。そしてこのように相対論が否定されれば、そこにあらわれるのは絶対の境であろう。そこでここでも、達磨はといえば仏法の生命の現われ、否仏法の生命そのもの、中国もインドも一切が仏国土といわれることになる。

兎に角この徹底ということは「參徹」「見徹」……「打得徹」という言葉でこの巻には異常といつてよいほど現われる。そしてこれが最後の文節において先師如淨禪師の言葉としての「祇管打坐」として集約されているといつてよい。道元にとって徹底とは「祇管打坐」なのである、あるいはこれを措いてないのである。この言葉は天童山の如淨禪師の方丈において親しく聞いた言葉なのである。だからこの巻においても道元が如淨禪師を語る時必ず口にされる「大宋国二三百年來は、先師のごとくなる古佛あらざるなり」を語っている。ところでこの言葉の出でくる文節(13)はそのように他の追隨を許さぬ如淨禪師の遍參を語って、大道無門ということは大道が閉じられているのではなく開放されていること、しかしそこに入るには「渾身跳出すること」、「頂額上に跳出すること」、「頂額上の跳脱」、「鼻孔裏の轉身」といった、何か身を翻して跳ぶことがなくてはならないことを述べている。要するに絶対境へは跳躍が必要とされているようである。このことは先に見た文節(6)においても見られるところである。そこでは二祖が何故インドへ行かなかつたかの理由として、達磨の青い眼の眼睛に飛び込んだから（「碧眼の眼睛裏に跳入するゆゑに」）だといっているからである。絶対の境地の開拓は「跳入」が必要である、否絶対境は「跳入」そのものとの感を深くするのである。そしてこの「跳出」といい「跳脱」といい、「跳入」といいまた「轉身」といわれるものが、最後の文節において先師如淨の「身心脱落」として集約されたと見たいのである。そのように見れば道元にとって「身心脱落」で一向に構わぬのであり、これこそが如淨禪師の精神なのである。

注

(1)

『梅華』の巻の如浄の句は次の通りであった。

波斯匿王、請_二賓頭盧尊者_一齋次、王問、承聞尊者親見佛來、是不。尊者以_二手策_一起眉毛_二示_一之。先師古佛頌云、策_二起眉毛_一答_二問端_一、親曾見_二佛不_一相瞞、至_二今應_一供_二四天下_一、春在_二梅梢_一帶_二雪寒_一。

この句は『梅華』の巻をとりあげた時記したように(拙稿『道元と如浄』(4注切))、『如浄和尚語録卷下』の「頌古」〔大正藏、第四十八卷、諸宗部(五)一、一三〇頁下〕に見えるものである。この句に対する道元の評釈は『梅華』と「見佛」という主題の性質から若干のニュアンスの違いが見られるが、その主張は同じものと考えられる。すなわち『梅華』では、われわれは、見仏とは「見釈迦牟尼佛なる」見仏、すなわち啐啄同時として、更に如浄と道元の相見を重ねてみたのであった。これに対する『見佛』の巻も「いはゆる見佛は、見自佛にあらず、見他佛にあらず、見佛なり。一枝梅は、見一枝梅のゆゑに開華明明なり」(大久保道舟編纂『道元禪師全集』上巻、四八六頁)、つまりここでは見佛とは、自己なる仏を見るのでも、他己なる仏を見るのでもなく、見仏が見仏すること、一枝の梅の華が一枝の梅の華を見るとされ、また「見佛は被佛見成なり。たとひ自己は覆藏せんことをおもふとも、見佛さきだちて漏泄せしむるなり。これ見佛の道理なり」(同上、四八七頁)とされ、見仏の現成は仏の方から、つまり自分の方から仏を見るのではなく、また仏は見えない存在のようになっている。仏の方から見仏を催うさせられるというのである。

(2)

大久保道舟編纂『道元禪師全集』上巻、四九三頁。

(3)

同右、四八九頁。

(4) 同上。

(5)

同右、四八九〜四九〇頁。

(6)

同右、四九〇頁。

(7) 同上。

(8)

同右、四九〇頁。

(9)

「扶出達磨眼睛」〔『大正新脩大藏經』第四十八卷、諸宗部五(一)〔「如浄和尚語録」卷上、「住建康府清涼寺語録」〕、

一一二頁、下〕

(10)

前掲『道元禪師全集』四九〇〜四九二頁。

(11)

同右、四九二頁。

(12) 同上。

(13)

同右

(14)

同右、四九二〜四九三頁。『大正新脩大藏經』第四十八卷、諸宗部五(一)、〔『如浄和尚語録卷上』「住建康府清涼寺語

録」〕、一一二頁上。

- (15) 同右『道元禪師全集』上卷、四九二頁。
 (16) 同右。
 (18) 同右『道元禪師全集』下卷、三七七頁。
 (19) 注(9)

(17) 同上。